「幻のどろがわいもを守る」

天川村農業委員会

1.天川村の農業の概要

天川村は、人口約1500人、面積約175㎢。奈良県の南部、紀伊半島の中央部に位置し、近畿最高峰を擁する最源流の村です。村の周囲の山々は、1500m～1900mの高山が十数峰ある深山地帯に属しているため、気候は低温多湿で、降雨量は比較的多くなっています。夏季はきわめて冷涼で、天然記念物であるオオヤマレンゲ群落や氷河期からの生き残りのシラビソやトウヒ、紀伊半島で最大級のブナ等の原生林など特異な植生もみられます。そして、村の4分の1にあたる52.74㎢が吉野熊野国立公園に指定され、自然環境に恵まれた美しい村として知られています。

かつては林業が主要産業でしたが、構造的な林業不況が久しく、観光産業が本村の基幹産業となりつつあります。農業は、小規模の農地が点在しており、その集積が難しく、農業で生計を立てていくのは困難な状況です。その為ほとんどの農家が自家消費を目的として耕作している状況です。

昨今は、有害獣による被害が著しく、高齢化も相俟って農家の耕作意欲を低下させています。

2.農業委員会における取り組み

①取り組み内容

古くから天川村洞川地区で栽培されていた「どろがわいも」という村固有種のジャガイモがありました。皮は薄いピンク色で白い花を咲かせます。煮崩れしにくく、ジャガイモ本来の味が濃厚で、カレーや煮物によく合います。

しかし品種改良した他のジャガイモにおされ、現在、村内では「どろがわいも」の存在が忘れ去られていました。平成22年にこのジャガイモについて問い合わせがあり、探したところ、昔からこの「どろがわいも」を作られていた一軒の農家でわずか10個の種イモが発見されただけでした。そこに追い打ちをかけるように、平成23年の災害で、耕作されていた方

の農地が一部浸水するアクシデントもありました。しかし、農業委員会が中心となり、「幻のどろがわいも」として村民に希少性を知ってもらい、この種を守り後世に継承していくために遊休農地を再生し、試験栽培を実施しています。

また試験栽培場の一部を利用して地元の小学生に農と食と人のつながりを感じてもらおうと、草引き、成長の観察、収穫まで、年間を通して栽培体験を実施しました。収穫後は、村内の幼稚園、小学校、中学校の給食の材料として提供し、農業を通してあたたかい地域のつながりを感じてもらうことができました。

②取り組みにあたっての課題

「どろがわいも」を村の特産品として育て、村の農業を活性化させること並びに、「どろがわいも」を使用した加工品の開発を通して、地域を活性化させることを農業委員会として手助けし、「どろがわいも」の取り組みを中心に高齢化する農業者の耕作意欲を高め、若い世代にも農業に興味をもってもらえるよう、PRを行っていく必要があります。

③課題への対応方策

まず、遊休農地を活用し、小学生との「どろがわいも」栽培体験を実施し、給食で提供することで、「どろがわいも」の希少性を知ってもらうと同時に、天川村に昔からある親しみのある野菜として知ってもらおうと考えています。また「どろがわいも」を使った加工品などの開発に関する勉強会を開催し、村民にも親しんでもらえる野菜となるように取り組んでいきます。

次に、農地パトロールを強化し、村内の農地の状況把握に努め、指導を行い、農業者との情報を共有し、村全体で有害鳥獣対策に取り組んでいきます。

さらに、様々な機関・関係者・村民で連携しあい、情報を共有しながら「どろがわいも」を通して天川村のPRも行っていこうと考えています。